

江戸艶語

山口謠司

Yamaguchi Yoji

インターナショナル新書 166

はじめに

なぜ、艶本を読むのか？なぜ、艶語なのか？

艶本——この言葉に、あなたはどんな印象を抱かれるだろうか。下品？淫ら？歴史の片隅に追いやられた風俗資料？あるいは、浮世絵の傍流に過ぎぬ戯れの記録？

もし、そう思われたのなら、私は、否と申し上げたい。

艶本とは、単なる「色の本」ではない。それは、歴史の波の奥に隠された、「江戸人の生きた実感そのもの」なのだ。

艶本は、辞書には載らない日本語の宝庫である。

私たちは学校で、「正しい日本語」や「丁寧な表現」を習う。けれども、それらは「整えられた日本語」であり、もつと言えば「削られた感情の抜け殻」である。

たとえば、「好き」という言葉。それは便利な単語だけれど、江戸の艶本には、同じ気持ちを伝えるために何十もの表現が使われている。

「身に沁む」

「思いに沈む」

「とろけてならぬ」

「ぼぼに灯が入る」

「ひとり寝の袖が乾かぬ」

どれも「好き」とも「愛している」とも書いていない。けれど、どれもが「好き」や「愛している」よりも、もつと深く、やわらかく、しつとりと心に沁みてくるのではないだろうか？ 艶本を読むと、日本語とは本来、こういう言葉だったのだと、しみじみとその言葉の魅力を味わうことができる。

それは、言葉が「理屈」ではなく「実感」の次元で私たちの内側に触れてくるからではないだろうか。

艶本に描かれた男女は、けつして理想の美男美女ではない。

酔つ払つていたり、口が悪かつたり、そそつかしかつたり。

それでも、ふとした瞬間、すこし濡れた視線や、指先の震えや、何気ない掛け合いの中に、はつとするほどの美しさが浮かんで来る。「生きている」というのは、こういうものだ、と。だから、エロスというものは、生きているということに繋がるのだろう。

また、艶本にしばしば出てくる言い回しに、以下のようなものがある。

「こは、ようようと」（そこ、だんだんと）

「いと、よきにて」（とつてもいいわ）

「や、そちは」（あら、あなた）

「こりや、あれかいの」（これは、もしかして、のこと）

いざれも、直截的（ちょくせつてき）な表現ではないからこそ、これらの言葉の余白には、読む者に伝わつくる情感が滲んでいる。

艶本は、单なる「いやらしい」ものではない。いや、むしろ「いやらしい」ことが、こんなにもおもしろく、切なく、優しいものだつたのかと読むたびに驚かされる。

「ほんに、もうおもひに思つて、かうゆつくり逢ふのだから、わたしもたんと楽しませておくれよ」と言ひながら、男の枕の下へ手を射し込み、片手を肩へ掛けて引き寄せると、男は寄りながら、すぐに女の舌を抜けるほどに吸ひながら、そろそろと臍（へそ）の下から撫で下ろし……」（『春夏秋冬色乃詠』）などという言葉などに出会うことがある。

この艶めいた言葉には、いやしさということ以上に、人の肌の温かさや、動きのリズム、音や匂いなどが見事に溶け込んでいる。

艶画・艶本は、生きた日本語の宝庫である。そこで使われている言葉たちは、辞書に載つて

いない、ググつても出てこない、学校でも教えてくれない、けれど、最も人間的で、最も日本語らしい、「江戸庶民たちの性も含めたリアルな日常」を知ることができるカギなのである。本書では、そうした艶語を取り上げ、庶民たちの深い古典の教養や、当時の流行語、語呂合わせなど、語源や使われ方などをひもときながら、江戸のイキイキした日常を読み解いている。江戸の男や女、武士や町人の、楽しむことをあきらめない、豊かで、したたかな色事の世界。そこには庶民たちの江戸のリアルが詰まっているのだ。

艶本を読むことは、言葉を愛するすべての者にとつて、それ以上に深くてやさしい日本語の入門はないのではないかとさえ思える。

江戸の光と影の中に咲いた艶なる一語。

そのひとつひとつに耳を澄ませながら、この本を、ひらいていただければ幸いである。

令和七年十一月吉日

董雨白水堂にて

山口 謠司

目次

はじめに

自行安味

我慢しすぎて血氣を停滞させると病気になる／男性が自慰をしている珍しい絵

九道具

男根を九種類に分類して順位付け／最上級は生麩のようにやわらかな男根

開

女陰の七つの分類／女性器の触れ方を指南した「陰脈の法」／顔の「七表」、背中の「八裏」から分かる女陰の良し悪し

かまをほる

葛飾北斎の艶本／「陰間」から「かま」へ／「おかまをほる」の語源は空海だった？

ネコとタチ

女性同士で行為を行う時に使う道具「互い笠」／張形は踵に結わえ付けて使うとよい

長命丸

それぞれの宿場での濡れ事を紹介する『旅枕五十三次』／「閨房喜悦之葉」の数々

まぐわい

性交をしてはならない日／亡夫の位牌を抱いて自慰する後家

やれしたがある

平賀源内考案の媚薬／“言語による愛撫”の書／やれしたがある——江戸の性愛と言語の“ずらし”技法

虎歩勢

「知性」と「情欲」が絡み合う瞬間／「鶴の構え」と「観音開き」

人身御供

「八犬伝」の裏を読む／獣、変化す——八総、美少年となる／「人身御供」伝承の官能的

パロディイ本／神と化け物と“性”——江戸艶本における供犠の変形／妄想——そして、江戸文学のエロティックな美学

魚接勢

江戸の「三人交わり」事情／「深浅の法」と「八深六浅」／「魚接勢」はど」まで続くか

なめくじり

その味、甘露の如し／中世艶画と「舐陰」の伝統／渓斎英泉の筆と、なめくじりの美学／養生とまぐわい——舐陰の医療哲学／近代文学と“なめくじり”的変奏

甲形

悦楽と妊娠のあいだに生まれた造形／渓斎英泉という“艶”的プロデューサー／悦びとは、仕掛けのある感情装置だった

八寸

八寸は「懷刀」／江戸時代の出逢い／懷石料理の「八寸」

四ツ目屋

艶具の百貨店／艶具一覧：四ツ目屋の宝箱より／艶語の宝庫／江戸の女たちと艶具店との文通

船饅頭

伽やろう、そして船饅頭／舟と土手——夜の二大艶舞台

念者

恋の始まり／唾と穴と、まさかの口吸い／念者の経済力、若衆の値段／茶で恋に落ちる、香五郎と卯右衛門／江戸男色の「三技」——口吸い・吸根・肛門愛

「ころぶ

「ころばぬ先の艶」「ころぶ」との来歴／口止め金、三両の艶／春色の艶と、羽織芸者の矜持／夏の湯浴み、月見とともに／「ころんだ先に待つもの

脰肭臍

通町に響く、江戸の声／脰肭臍の正体／一粒金丹と、東北のぬし薬／男の味は、夜這いに「そある

お抜け参り

「お陰参り」「お抜け参り」／山椒を使う

出合茶屋

密会の場としての「色茶屋」／密室の中の“素人の恋”／「盃、肴、木枕二つにふとんを添

えて」／江戸は、『二階』で交わる——料理茶屋・釣物宿／『知恵』と『羞恥』——江戸の性愛に宿る、美のかたち

吐淫

舐淫、なめくじり、吐淫／年増女房の色香／夜の深川、湯屋の情景より／艶本に描かれた吐淫——文字の奥に濡れてきらめくもの／「水」の語彙考

立つ

言葉の奥に灯る炎／艶画に描かれた『後家』／「男妾」／『華のあり香』に見る後家の心

凡例

作品本文の引用にあたっては、読みやすさを優先して、句読点や濁点を施し、適宜、かなに漢字を宛て、漢字をかなに改める、送りがなを補うなどの変更を加えました。また漢字は通行の字体を用い、ふりがなは一部加除しました。本文のかな遣いは原文ままでですが、ふりがなについては現代かな遣いにしています。

江
戸
艶
語

自行安味

——自分で自分の心と身体を鎮め穏やかにする行為。自慰のこと

我慢しすぎて血氣を停滞させると病氣になる

自慰という行為は、男性も女性も、我慢ができずにしてしまうものなのであろう。

本当なら、男性も女性も、交わりたいと思った時に自分の好きな男性、女性と思いつきり交わればよいのだが、なかなか事情が許さない。仕事もある、家庭もある、相手がない、買おうにも金がないなど、江戸時代の人も、交わりたい時に交われない事情はたくさんあつた。

そんな時には、我慢をするしかない。

儒学者であり、本草学者でもあつた貝原益軒は、養生（健康、健康法）の指南書である『養生訓』の中で、「色念をこらへて情を遂ぬは 腰湯に下をあたためてよし」と、もしどうしてもやりたくなつてしまつた場合には、下半身を温めればきっと我慢ができるだろうと教えている。ただ、当時は、我慢をしそうで、「血氣（エネルギーや循環）」がめぐらないと病氣になると

も信じられていた。

江戸時代中期に書かれた、月岡雪鼎画『艶道日夜女宝記』（明和元（一七六四）年頃刊）という本がある。この本は性愛の作法書で、男女の交歎を「道」として捉え、夜の営みにおける心と身体の調和の大切さを美しく、そして時にユーモラスに描いている。

調和がとれた身体を「宝」として讀え、身体をそうちしたすばらしい状態に導くための技巧を図解を交えて伝えており、性愛を単なる一時の刺激、悦楽を求めるものとしてではなく、人生の愉悦であるとして、性愛の美学、性愛の哲学を語っていることにおいては、まさに「色道の教養書」と言つても過言ではないだろう。

さて、本書の冒頭「自行安味法」には、「夫安味は男女共に虚損すと云ども、血氣めぐらざれば、かへつて病をなす也。人、常に五臓の血氣どうよう（動搖）すれば、血よくめぐるゆへに、じんすい（腎水）くさる事なし」と記されている。

「自行」とは、「自分で行うこと」、「安味」とは「心身が鎮まつて穏やかに安定した状態」といった意味であり、自分で自分を気持ちよくすること、つまり現代で言う「自慰」のことなのだが、読み方が「あんま」というのであるから、「按摩」と同義で、「手でしごく」ということも暗にほのめかしてあることは言うまでもない。

「虚損」とは、生殖行為としてはまったく無駄なことをいう。つまり、この一節は、自慰は男

女ともに無駄な行為だと言われているが、無駄だからといって自慰を禁じて血氣を停滞させることはむしろ病のもとであると説いているのである。

「血氣」とは、もともとは文字通り「血液」と「氣息（息づかい）」のことを言つたが、江戸時代には「生命を維持するための漲る活力」を意味するようになつていた。

当時、男性の精液は「腎水」と言い、腎臓で作られると信じられていた。「腎水」が出なくなると、もう男としての用をなさなくなつてしまふ。それは、血氣が滞つてしまふことと無関係ではない。

幕府の奥医師・多紀元徳は、養生法を短歌の形にまとめた『養生歌』で、

腎水は人の命の本なれば おしみたもちて大切にせよ

と歌つてゐる。活力が滞つてしまふと、性的に不能になるだけでなく、病気になつて、はては死に至るかもしれないというのである。

つまり性愛は、乱れすぎれば害となるが、適度な悦びは身体と心の調和を保ち、腎（性と精のエネルギー）の衰えを防ぐという、東洋的生命觀に基づいた性愛養生論なのである。

男性が自慰をしている珍しい絵

さて、『艶道日夜女宝記』には男性が自慰をしている珍しい絵が掲載されている。



【図①】

この男は、女性が両足を開いた姿の絵を、わざわざ軸装にして掛け、自慰をしているのである【図①】。

「自身安味の図」とタイトルにあり、「だきつかいでざんねんな（抱きつけなくて残念だ）」と独り呟いているのだが、まさにエロ動画を見る現代の男性と同じだろう。

「自身」とは「自分自身で」という意味なので、「自身安味」も「自行安味」と同様、もちろん自慰のことである。

この絵を描いた月岡雪鼎（一七二六～一七八七）は大坂の絵師だが、よく知られている彼の逸話に次のようなものがある。

大坂で大火事があつた際、ひとつ土蔵だけが焼けずに残つていた。開けてみると雪鼎の艶画がたくさんあつた。以来、雪鼎の艶画は火除けのま



【図②】

じないになると言われて、高値で売買されるようになつたという。

神秘的な力が宿つっていても不思議はないと思われたことからも分かるように、雪鼎は艶画を描くことに長けていた。彼の艶画は、直接的な裸や性交の様子だけでなく、視線の交差、手の位置、着衣の乱れ、畳の凹みといった見る者の想像に訴えるようなこまやかな表現を通じて、心の機微と身体の疼きを同時に伝える構図美に秀でていた。

さて、自慰行為を描いた雪鼎の絵をもう一点紹介しておこう。艶本『会本夜水交』（刊行年不明）には、「菊慈童の事」「衆道遊びの事」など、男色の話を描いたものがあるが、そういった中のひとつに男が竹の子を握つて、自身の陰茎を立たせて自慰に耽つているものがある【図②】。

男は、「ええ におひ、こいつには おどろい

たなあ」と言っているのだが、なぜこれが男色の絵なのかというと、五月頃にニヨキニヨキと地面から顔を出す竹の子の匂いが精液の匂いに似ていることから、男は男色を想つて自慰に耽つてゐるというわけなのである。

さて、自慰には、「自行安味」のほか、「かわつるみ」「きせはぎ」「あてがき」「五人組」などという言い方があった。

また、江戸時代には中国から入ってきた漢字を真似て国字（和製漢字）が多く作られたが、その国字の中にも自慰を表すものがある。「搾」という字だが、文字通り、「オ（手）」を「上」「下」させて自慰をするからであろう。

自慰を表す言葉からも、さまざまに江戸の人々のセンスを感じ取れるのではないだろうか。

江戸艶語

山口 謠司

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定価：1,100円（10%税込）

発売日：2025年12月5日

ISBN：978-4-7976-8166-6

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらからどうぞ！](#)